

1. テキスト：

『働くものから見るものへ』「場所」216 頁 5 行目～217 頁 12 行目

2. テキスト要約

この段落冒頭、認識論を自覚から出立して考えて見たいという西田の根本的な立場が述べられる。その際「自覚」とは「自己の中に自己を映す」ということである。その場合まず「自己に対して与えられる」ものは「自己の中に於て与えられる」ということが出発点を成す。自己の外部というものは無い、換言すれば自己においてすべてがすでに与えられているということである。その上で「知る」ということは「内に包む」ということだとされる。包まれるものが外にある時は「単にある」というのみで、「知る」ということには至らない。包むものと包まれるものの「一」を考えるなら、それはどこまでも「一」にならないという意味で「無限の系列」を形成するが、これを逆に考えてその「一」なるものが「無限に自己自身の中に質料を含む」と考えれば、そこに「無限に働くもの」「純なる作用」が成立する。ここにはキーネーシスの見方からエネルギーの見方への転換がある。

しかしこの「純なる作用」もなお「知るもの」ではないとされる。「純なる作用」は「形相的構成」として質料を、自己の内部とは言え「潜在性」(218, 11-12) という意味で自己の外に持っている。こうした「純なる作用」すなわち「形相」、および「質料」との両者の対立をも内に包むものが「知るもの」である。かくして「知るもの」は「純なる作用」を成立させる「場所」である。

このように「知るもの」が「場所」であることによって、「思惟の場所」に於てある「思惟の対象」は無限に可分的（分析可能）になるのである。ラスクが「主観が客観的对象の破壊者」と考えたのも主観が知るものとして思惟対象（超対立的対象＝客観的对象）の於てある場所であることによる。

このように「知るもの」を「場所」と考えるならば、「統一」「作用」という意味がなくなってしまうのではないかと懸念する向きもあるだろう。しかし物理学において「力（作用）の場」というものが考えられるように、認識の場所も「純なる作用」を含み得る。そこに形相・質料ないし主観・客観の対立も成立する。それができないというのは「場所」ということで、「於てあるもの」に対して「外的なる場所」を考えているからだ、と西田は言う。かくして「真に種々なる対象を内に包むというべきもの」つまり「場所」は、「自己の中に自己の形を映すもの」つまり「自覚」だ、というのがこの段落での西田の主張である。

しかしこのように言えば「於てある」という意味を失うと懸念する向きもあるかもしれない。しかし「意識の野」というのは「すべての認識対象」を「内に包み」、しかもこの対象を離れ（したがって映すことができる）、その意味でこの二つを結合できるのである。